

かんよう 「寛容になりましょう」「見かたを変えて考えてみよう」

※寛容とは=自分とは違う意見や価値観を受け入れようという気持ちを持ったり、他人の失敗や失礼な態度や行動を厳しく責めたりしないこと

1月から3月まで放送されたドラマの中に「不適切にもほどがある」というドラマがありました。このドラマは、生徒に暴言を吐き、部活で失敗した生徒のお尻をバットで殴るなど、今なら考えられないようなことばかりしていた昭和の中学校教師 小川市郎が、1986年から2024年の現代へタイムスリップしてしまうという物語です。昭和では、運動する時に水を飲むと「ばてる」から、運動中はもちろん、運動後30分は絶対に水を飲んではいけないと言われていたのですが、私が学生の時に、朝練の後に同級生が「水を飲みたい！」と叫びながら我慢していたのを今でも覚えています。そんな昭和に比べたら、令和は「学校で体罰をふるわれることもないし、先生たちからどなられたりすることもないし、運動する時には定期的に水分を取る時間を確保してもらうなど、1人1人が大事にされていて、みんなが幸せに暮らしている時代」のはずです。しかし、主人公の市郎には、令和の日本は、お互いに言いたいことも言えず、必要以上に周りの目を気にして、不安になったりイライラしてしまったりすることが多い、とても生きづらそうな社会に見えたのです。



市郎とは逆に、令和から昭和に一人の女性サカエとその息子キヨシもタイムスリップするのですが、サカエは、セクハラ、女性差別発言ばかりの昭和に来て衝撃を受ける一方、スマホもSNSもない昭和のコミュニケーションの取り方に魅力を感じていき、中学生の息子キヨシに至っては、令和では不登校だったのに昭和では学校に通い、昭和がいいから令和に戻りたくないと言い出すのです。主人公の市郎以外の登場人物も、昭和と令和を行ったり来たりする中で、便利さと幸せを求めた令和の社会に何が足りないのか、令和の今、本当に必要なことは何なのかを考えさせられるドラマで、最終回には「昭和も令和も生きづらい」という結論になり、令和を変えるのに必要なメッセージが伝えられます。



<メッセージ1>

「スマホじゃないでしょ、私たち。人間同士なんだから。片っぽ(片方)がアップデートできてないとしても、もう片っぽが寛容になれば、まだまだ付き合えるでしょう。とどのつまりは、もっと寛容になりましょうよ！ちょっとのズレなら、ぐっとこらえて、寛容になりましょう。大目に見ましょう。どんと構えましょう。」

昭和を生きた私からしたら、今の時代は「やさしい」し「便利」な世の中になりました。その一方で、失敗が許されない、失言が許されない世の中になりました。完璧な人はいないのに、だれでも失敗をすることはあるはずなのに(もちろん許されないものもありますが)「おたがいさま」ではなく、他人の失敗や小さなミスや失言をSNS上で攻撃し、罪を犯したわけではないのに学校や仕事を辞めざるを得なくなったり、自殺に追い込まれたりすることも起きています。また、今はスマホ1つでお金の支払いも、ゲームも調べ物も写真や動画の撮影や保存もできるし、遠く離れている人とすぐに連絡を取り合えたり、普通なら出会えない人と出会うこともできたりす



ので、便利で楽しくて幸せな社会だと思う一方で、この時代に高校生でなくてよかったと思う自分もいるのです。昭和なら、見える友だち、目の前にいる友だちとだけコミュニケーションをとればよかったのに、令和では、家に帰ってからも学校が休みの時も、SNSを通じて自動的に流れてきたり、大量に送られてきたりするメッセージを、こまめにチェックしたりメッセージを返したりしなければなりません。家に電話が1つしかなく、通話料が高かった昭和なら、良くも悪くも家に帰ってから友だちと長時間話すことはできませんでしたが、今は通話料が無料で何時間でも話すことができるので、家に帰ってから寝落ちするまで、ずっと通話状態にしているという話も聞いたことがあります。



また昭和では、友だちに悪口を言われていたとしても、直接聞く以外は知る方法はなかったのに、令和ではSNSを開けば、誰かの悪口や誰かを責めるようなネガティブなつぶやきがあふれています。しかも、それが自分のことなのか他人のことなのかわからないので、「これはわたしのことかもしれない」「もしかしたら、嫌われているのかもしれない」と、実際には起きていないこと、言われていないことまで心配したり、不安になったりしてしまいます。



実際、「寛容ではない令和」では、自分の言葉や自分の行動が、想像以上に攻撃されたり、周りとは少し違うことをすると仲間外れにされたりSNSでのいじめに発展したりすることがあるので、そのように不安になるのもしかたがないことかもしれません。以前ある生徒から「自分は携帯のない時代に生まれたかった」と言われたことがありますが、SNSに振り回されたり、SNSを使ったコミュニケーションに疲れていたりする生徒も多いのではないのでしょうか。

<メッセージ2>

「わたし あなたじゃないから100%は寄り添えないわ」「寛容と甘えはちがいます！」

令和では、「空気を読む」と言って、相手の願いや気持ちを察して動くことが当たり前になり求められ、いつも友だちの顔をうかがい、疲れている生徒も少なくありません。また逆に、友だちに自分の気持ちをわかってほしい、自分の願い通りに友だちに行動してほしいと思っている人もいないのでしょうか。でも、友だちは「あなた」ではありません。あなたの気持ちを100%察してわかってくれて、寄り添ってもらうことは無理です。逆にもしあなたが友だちから、さまざまな相談をされたりお願いをされたり、次から次へとSNSのメッセージが来たりした時に、忙しいのに、疲れているのに、無理して100%寄り添う必要はありません。そんな時は身近な大人、保護者や先生、保健室に相談して、友だちの問題が解決する手助けをしましょう。



余談ですが、ドラマの中でツツパリ(校則を守らない服装や行動)をしていた市郎の娘 純子は、昭和から令和に行った後にこう言います。「ツツパリって反抗の証だと思っていたけど反抗って結局、甘えなんだよね。心からほっといて(かまわないで)ほしかったらほっといても大丈夫そうな服を着れば良いし…。」つまり、注意されるのがわかっていて、あえて学校のルールを守っていないのは、先生や保護者に対する甘えだったと気がついたのですが、心当たりのある人はいませんか？



さて、上尾橘高校の1年生で行われているキャッチアップタイムの最終日に「見かたを変えて考えてみよう」という授業があります。これは、自分や友だちの短所を、見かたを変えて考えてみることで長所に変えていこうという授業ですが、最後に送っているメッセージには、お互いに「寛容になりましょう」という思いも含まれています。「1人1人が、自分に対しても、友だちに対しても、短所と思っていることが、“本当は違うかもしれない あの子は確かに失敗が多いけど、直そうとがんばっているのかもしれない。”と見かたを変えて考えてみると、学校があたたかい言葉やあたたかい雰囲気になって、学校生活や人との関わりが楽しく感じるようになります。」

最初に紹介したドラマの話に戻りますが、令和から昭和にタイムスリップしたキヨシが令和に帰る時に、昭和で友だちになった不登校の佐高君にこんなメッセージを送りました。

<メッセージ3>

「行けよ、学校。学校なんてさ、自分と気の合わないヤツが、この世界には存在するってことを、勉強する場所だけさ。その中で、1人か2人、友だちが見つければ、他は死ぬまで会わなくていいヤツらだから。オレは、佐高君に会えてよかったし、それは学校のおかげだし。気が合うヤツとはつながれて、合わないヤツとは関わらなくて済む。便利なもの、もうちょっと辛抱すれば、たくさんできるからさ」

そう言ってキヨシが戻って来た令和に、今みなさんは生きているのですが、本来スマホやSNSは「気が合うヤツとはつながれて、合わないヤツとは関わらなくて済む。便利なもの」であって、「気が合わない人とも無理につながったり、関わったりしないといけない不便なもの」ではないはずですが。

多くの人が生きづらさを感じる令和の今、あなたにとってこの橘高校が「あたたかい言葉」や「あたたかい雰囲気」の中で、お互いが「甘えではなく寛容な気持ち」で助け合える場所になってほしいと思います。もし困ったこと、悩んでいることがあればすぐに先生や信頼できる大人に相談しましょう。こんなことを相談しても無駄だと思っていたり、誰に相談していいかわからないと思ったら時には、保健室に来てくださいね。

こまっていることはなに？

